

東北地方太平洋沖地震に伴う農作物被害の技術指導について(第2報-1)
—塩害等の対策—

平成23年3月14日
農林水産部担い手支援課

1 水田の塩害対策

- (1) ポンプ排水等で、早急に海水を排水する。
- (2) かんがい除塩を行う。塩害ほ場に真水を入れ、耕耘して土壌と真水を混合して田面水を排水して塩分を除く。土壌中の塩分が除かれるまで、この作業を数回繰り返す。
- (3) 除塩効果は、作土の溜まり水又は土を掘って出てきた水の EC 値が1mS/cm 未満であることを確認する。
- (4) なお真水のかんがい水が確保できない場合には、水尻を止めて雨水をため、代かき後に田面水を排水する。

2 水田の液状化現象対策

- (1) 耕盤が破壊されていることも考えられるので、まず水田に入って足で確認する。
なお、液状化した砂が噴いた穴は、足がとられるので、はまらないように気を付ける。
- (2) 農作業機械が走行できることを確認して、噴いた口をふさぎ、砂を作土中に均一に混ぜるため、できるだけ速やかに、ていねいな代かきをする。
なお、農作業機械が耕盤から落ちないように細心の注意を払う。

3 水稻の耕種的対策

- (1) 播種作業時に断水が見込まれる場合の対策
 - ア 現在、種子消毒中の場合
所定の消毒作業後、陰干しし浸種まで日陰に保管する。
 - イ 現在、浸種早期(薬液浸漬含めて3日以内)の場合
早めに引き上げ、温度が上昇しない場所に広げ陰干しする。ネット袋に入れて、浸漬再開まで保管する。

ウ 現在、催芽近くに至っている場合

粃が乾燥しない程度に脱水し、冷暗所(約5℃)で保存する。この場合、保存期間が長くなるほどカビが生えやすくなり、発芽率も低下するので、保管中の管理に細心の注意を払う。

(2) 本田の水確保が不確定な場合の対策

早めに耕耘して耕盤の亀裂等をふさぎ、雨水を貯めておく。

用水の来る時期を見込んで作付け計画を見直す。なお、5月中旬以降の田植えでは、「コシヒカリ」は稈長が伸びて倒伏しやすくなるので注意する。

(3) 砂の混入等による地力低下への対策

噴き出した砂の混入等によって、植え付けた稲の葉色が淡くなることがあるので、よく観察し部分的な追肥は時期や量に注意して行う。

有機物の施用は、塩害のおそれのある場合に根傷みを助長するので避ける。

4 畑の塩害対策

(1) 収穫間近のネギ等の作物がある場合は、収穫を急ぐ。

(2) 海水の早期排水

海水が溜まっている状態では、塩害と同時に酸素不足による過湿害が問題となるので、溝切り又はポンプ排水で早急に排水を行う。

なお、水が流れていれば湿害も起こりにくいので、排水対策が難しい場合には、水田の場合に準じてかけ流し除塩等を行う。

(3) 排水後の真水かん水による除塩

20mm程度の真水かん水を2~3回行う。

(4) ECメータで洗い流しの効果確認

作土(1:5)のEC値は1mS/cm未満が望ましい。

(5) その他、作物がない時期の対策

作土(1:5)のEC値が1mS/cm以上と高い場合には、土壤に吸着されたナトリウムをカルシウムで置換・排出させるため、石灰資材を100kg/10a程度施用し、耕耘後に真水の湛水又は、かけ流しを行い作土のEC値を1mS/cm未満に下げる。